

リストカット経験者のコミュニケーション様式

——親子間に生ずる<教育>^{ペダゴジック}コミュニケーションとの関連性——

戸高七菜（一橋大学大学院）

1. 問題の所在

自傷行為についての先行研究では、自傷行為者が、しばしばその実行を他者に提示することで他者の態度や行動に影響を与えようとし、また実際にもその意図したように機能することがあると指摘されてきた。これを本稿では自傷行為の他者コントロール機能と呼ぶ。この機能を用いたコミュニケーション様式の特徴とはどのようなものなのかについても、臨床的な観察の分厚い蓄積がなされてきた。しかし、このように他者への期待を直截には言語化せず暗黙裡に伝達しようとするようなコミュニケーション様式がどのように形成されてきたものなのかについては、十分明らかになっているとは言い難い。

今報告では、自傷行為者のコミュニケーション様式が形成されるにあたって、親子間のコミュニケーションが与える影響に注目する。親とのコミュニケーションは、子どもがコミュニケーションスキルを学習しコミュニケーション様式を確立していく上での重要なモデルである。ならば、自傷行為者が自傷行為の他者コントロール機能を用いるようになり、また用い続けるにあたって、親子間で行なわれてきたコミュニケーションはどのような影響を与えてきたのだろうか。

今報告で特に注目するのは、親子間で<教育>実践が行なわれる際に生じる<教育>コミュニケーションのありようである。自傷行為の他者コントロール機能の利用を結果的に後押ししてしまうような<教育>コミュニケーションとは、どのような特徴をもったコミュニケーションなのだろうか。

2. 分析対象

多数ある自傷行為のなかで、リストカットがもつ特徴としては、他者への提示が容易であること、致死率が非常に低いにも関わらず自殺というイメージを強く呼び起こす自傷行為であることがあげられる。

今報告で事例として分析するのは、あるリストカット経験者（以下Cさん）に対して2005年6月から2007年4月にかけて行なった電話または対面によるインタビュー調査の記録と、Cさんが2005年12月から2007年3月までインターネット上に日記として公開した文章、筆者とやり取りしたメールで

ある。

これらの資料をもとに、Cさんの両親とCさんとの間でどのような<教育>コミュニケーションが行われ、それがCさんのコミュニケーション様式全般にどのように影響したかについて、バーンステインの<教育>理論に依拠して明らかにしていきたい。そのため、今回は自傷行為を行うことそのものが持つ意味や機能については検討せず、自傷行為を行った事実を他者へどのように何のために提示するかという点に焦点を絞って考察する。

3. バーンステインの<教育>概念と統制様式

バーンステインのいう<教育>（pedagogy の訳語）とは、「行動、知識、実践、基準の新しい形、ないし今より発展した形を、ある者が、適切な提供者であり評価者であると見なされている他の者から（ないし何事かから）獲得する、持続的な過程である（バーンステイン：2000）」¹。この定義からいえば、ある文脈においては親子の間でも<教育>実践が行なわれるのであり、家庭とは<教育>コミュニケーションと<教育>外コミュニケーションとが混在する場であるといえる。

<教育>実践という視角から親子関係を記述するならば、親は伝達者であり評価者である。獲得者である子どもは、文脈を弁別し、その文脈に適切な、期待される正統なテキストを構築するように志向する。「この構築されるテキストはどのように座るかとかどのように動くかなどにすぎないかもしれないが、テキストは何らかの形で評価を誘発する（バーンステイン：2000）」²。獲得者である子どもは、伝達者が期待する正統なテキストを構築できたかどうかで評価されることになる。

<教育>実践には、伝達者と獲得者のヒエラルキー関係、組織化ルール（順序づけ・ペース）、評価基準が獲得者に対して明示的に示され伝達者の統制が顕在化している場合とそれらが暗示的にしか示されず伝達者の統制も潜在化する場合がある。バーンステインは、前者を「見える<教育>実践」、後者を「見えない<教育>実践」と呼んだ。

「見えない<教育>実践」では、獲得者である子どもにも与えられる自由裁量の幅は一見大きい、顕在

的/潜在的に伝達者が統制を及ぼし最終的な評価を行なう。評価基準が明示されないならば、獲得者は伝達者が暗黙裡に提示する期待を読み取り、それに沿って行動しなければならない。伝達者が前面に出てくることをどんなに避けたとしても、「見えない<教育>実践」で行なわれる<教育>コミュニケーションとは、獲得者が伝達者の期待を読み取り、それにしたがって期待される正統なテキストを構築し、その構築したテキストが伝達者によって評価されるコミュニケーションなのである。

4. Cさんの家庭における<教育>コミュニケーションと「見えない<教育>実践」(略)

5. Cさんのコミュニケーション様式の特徴 (略)

6. Cさんの日記におけるリストカットの位置づけと語り方 (略)

7. 結論

子どもが親以外の他者と取り結ぶコミュニケーションに、親とのコミュニケーションが影響を与えるのは当然である。しかし、親からの潜在的な統制は、子どものコミュニケーション様式を形成する上で独特の影響を持っている。

まず、親との間に潜在的/願在的な統制が混在した<教育>コミュニケーションがおこなわれる中で育った子どもは、家庭でも学校でも潜在的/願在的な統制が混在した<教育>コミュニケーションを体験し、二重の文脈でコミュニケーションには潜在的な期待と評価が隠れているということを学ぶことになる。

また、「見えない<教育>実践」での<教育>コミュニケーションは、ヒエラルキー関係が隠蔽されているため、<教育>外コミュニケーションと区別することが難しい。そのため子どもは、<教育>コミュニケーションで身につけたコミュニケーションスキルやコミュニケーションコードを、<教育>外コミュニケーションでも利用する可能性が高い。

ここで、4節から6節の内容を簡単にまとめておこう。Cさんの家庭で行なわれる<教育>実践は、その時々に応じて「見える<教育>実践」と「見えない<教育>実践」とが混在したものである。Cさんは家庭での統制に対して、明示的な指示だけではなく暗示された期待に対しても敏感に反応し、「従わされた」と感じている。

そのような<教育>実践のもとで育ったCさんのコミュニケーション様式の特徴は、①自分の要望を言語的直截的に表現することを避けること、②コミ

ュニケーションを双方向的なものではなく一方的に「コントロールする/される」ものとして捉えることがあげられる。

「見えない<教育>実践」での<教育>コミュニケーションにおいては、伝達者が獲得者へ自分の要望を直截的言語的に表現することは、ヒエラルキー関係を押し出し他者へ命令する行為として忌避される。そのため、子どもの側は明示されていない親の期待を読み取らねばならず、コミュニケーション全般で自分の要望を率直に表現することを望ましくないものとして避けるようになる(①)。

また、どのようなコミュニケーションも、他者へある行動をするよう依頼したり、他者の要望を受けて自分の行動が影響されたりという相互作用的な側面を持っているが、他者とのコミュニケーションすべてを<教育>コミュニケーションとして体験した場合、自分を獲得者としてみれば伝達者の依頼や期待は評価を背景とした強い命令として体験されるし、伝達者としてみれば自分の言動が獲得者の主体性を踏みにじる行動へのコントロールとして体験される(②)。

今まで、自傷行為の他者コントロール機能の利用は、本人の選択による戦略的かつ積極的なものと見なされてきた。しかし、自傷行為者が家庭だけでなく学校でも経験し学習してきた<教育>コミュニケーションの様式と、自傷行為の他者コントロール機能を用いるコミュニケーション様式との間にある相同性に注目すれば、一部の自傷行為者にとって、コミュニケーションにおける他者コントロール機能の利用は当人の自覚的な選択を超えたものであるといえるだろう。

自傷行為の他者コントロール機能を用いる自傷行為者は、言語的直截的なコミュニケーション様式を望ましいものとして学習した体験に乏しいことが多い。かといって、オルタナティブなコミュニケーション様式を意図的に学習させようとすることは、結局一つの<教育>実践として、伝達者の期待を読み取って行動することをよしとする価値規範を背景としなければ成立せず、その価値規範を伝達強化してしまうという逆説に陥る。自傷行為者を援助する困難を直視し、自傷行為の他者コントロール機能を用いるコミュニケーション様式がどのように形成されてきたかを問うことは、<教育>という営みが本質的に他者コントロール幻想を持っていることを浮き彫りにするのである。

(事例の詳しい分析については当日配布の資料をご参照ください)